エッセー

「江戸と文学」の担当を終えて

加藤　定彦

科目の出発点

30年ほど前、研究休暇で京都に内地留学中、前田愛（よしみ）教授（1987年没）から新刊の大著『都市空間のなかの文学』（筑摩書房、1982年）を恵送いただいた。都市と文学作品とを相関するテクストとして読み解いた斬新かつ意欲的な評論集であった。大いに刺激を受けて、自分も江戸の地理を勉強し、そうした講義をしたい―といった趣旨の礼状をお送りした。京都留学の目的も、一つには実地に歩いて京都の地理を脳裡にたたみ込もうというところにあって、同じことが東京＝江戸についてもいえたのである。学生時代、寮や下宿と大学の間を往復するだけだった私の東京＝江戸に対する土地勘の悪さは、近世文学者として致命的であった。

大学に復帰し、一般教育の自由科目で「江戸名所を歩く」の講義を始めたとき、前田教授は礼状の文面が社交辞令でなかったことを知って、いささか面妖な表情をされた。私がそうした講義を担当する器でないことをご承知で、看板を掲げても果たして講義を無事こなせるかどうか危ぶまれたのだと思う。私としては、講義しなければならないとなれば、いやでも勉強して、江戸の地理も頭に入るであろう―といういささか乱暴な発想だったのである。

学生諸君と名所散歩

講義のコンセプトは、江戸という都市のもつ魅力を知るとともに肌で味わってもらうところにあったので、通年科目のメリットを活用、夏休みと冬休みに各1回、名所散歩を学生諸君とともに実施した。暑い時期は涼しげな郊外の名所、冬休みは初詣を兼ねたコースとなった。

学生諸君といっしょに歩く楽しさは格別だったけれども、参加人数が多いと、集合時間に遅れたり、道路が一度の青信号で渡れない。友達同士で話していて見学対象を見ず、解説も聞かない。昼食も全員が同じ店に入れないなどなど、とかく時間のロスやトラブルが多いので、後にはコース案内のパンフレットを配布し、銘々で都合のよいときに好きなコースを選んで回り、休み明けに証拠資料を提出してもらうことにした。

コースは、名所の条件〈山の辺＋水の辺〉を充たす、以下の5通りほどであった。

A）ハケの道を歩く（JR西国分寺駅～武蔵小金井駅）…国分寺址・お鷹の道・殿ヶ谷戸公園・玉川上水・江戸東京たてもの園

B）真間・葛飾を歩く（京成線国府台駅～金町線柴又駅）…真間の継橋・手古奈堂・真間の井・国分寺址・野菊の墓文学碑・矢切の渡し・帝釈天

C）墨堤・浅草を歩く（東武伊勢崎線鐘ヶ淵駅～浅草駅）…木母寺・向島七福神・百花園・桜橋・真土山聖天宮・浅草寺

D）飛鳥山・滝野川を歩く（JR王子駅～駒込駅）…名主の滝公園・王子稲荷・音無親水公園・飛鳥山・西ヶ原一里塚・

西福寺（伊藤伊兵衛墓）・旧古河庭園・六義園

E）都心の寺社を歩く（JR お茶の水駅～上野駅）…湯島聖堂・神田明神・湯島天神・不忍池・黒門・清水堂・東照宮・寛永寺・両大師

名所散歩の証拠資料―張り交ぜ

立教科目「江戸と文学」へ

〈一般教育〉から〈全学共通カリキュラム〉に改訂され、立教科目のなかに「江戸と文学」が設けられた。「江戸名所を歩く」の内容を半期用にアレンジし、名所散歩も 1 回に減らして、科目を担当して来た。

全学カリキュラムのコマ数の減少と学生数の増加のためであろう、授業を 3 時限目に置いたところ、履修者が 350 名ほどに急増して、大教室での授業となった。それまで江戸時代の出版物や錦絵・地図などの原資料を持参し、適宜回覧するというスタイルを取っていたが、それが不可能となった。

翌年から時間帯を 5 時限目に移し、資料はパワーポイントで投影することにした。しかし、年度ごとに教室が変わることが多く、新しい AV 機器に馴れるまで手こずって円滑な講義ができず、受講生にもどかしい思いをさせてしまった。

また、最初の授業時、講義の趣旨・内容について説明し、シラバスにも明記してあるにもかかわらず、科目名に比し「文学」の要素が少ない―と不満をもらしたり、事故に遭う可能性のある危険な名所散歩をさせるのは非常識だ―と批判を表明する学生もいて、心外な思いをした。

逆に、楽しい授業だった―との感想を試験答案や散歩証拠資料中に何度か発見した。ゴマすりなのかもしれないが、学生諸君の心遣いに感謝したい。

吉宗と鞠塢の〈名所づくり〉

新興都市江戸で注目されるのは、山の手の〈武家地〉と下町の〈町人地〉の境界に〈寺社地〉を配した絶妙な〈都市計画〉にある。洋の東西を問わず、かつてマツリゴトが行われた宗教施設は〈マチ〉の中心に位置した。樹木が多く、庭園美を備える江戸の寺社地は、武家地と町人地の境界にあって心身解放の場となっていたのである。

さらに特筆すべきは八代将軍徳川吉宗の政策であろう。吉宗は質素倹約を旨とする緊縮財政を推進する一方、江戸市民のために飛鳥山に桜や楓などを植樹して開放、行楽文化や園芸趣味発展の機運をつくり上げた。

「昔誰かかる桜の種を植ゑて吉野を春の山となしけむ」（藤原良経）と古歌に詠まれたように、ほとんどの桜名所は人為的に作られたもので、アプリオリ

には存在しない。

飛鳥山の植樹には染井（豊島区）の植木職人が活躍し、周知のごとく、桜の代表的な品種「染井吉野」も染井の植木職人が生み出したものという。なかでも有名な職人が伊藤伊兵衛で、ツツジの品種「霧島」など多くの花卉（かき）草木を植木畑に蓄え、関係著述も出版した。その活躍ぶりは、2003年10月、池袋駅南口からすぐの豊島区郷土資料館の第2回企画展で詳しく紹介され、図録も出されている。

〈花暦〉に象徴される江戸の行楽文化や園芸趣味は行楽名所案内書『江戸名所花暦』だけでなく、滑稽本や黄表紙・人情本などの大衆小説や錦絵にも大きな影響を与えていくことになる。

また、佐原鞠塢（きくう）のように名所や文芸・園芸趣味を生計とする者も現れる。鞠塢は買い取った向島の屋敷に諸家から梅の寄進をうけて百花園を開設し、『万葉集』の草木花卉や春秋の七草を植えたり、隅田川絵図や七福神の一枚摺、案内書『墨水遊覧誌』を出版し、隅田川の土で焼いた茶器でお茶を点（た）ててもてなすなど、あの手この手で行楽客を誘致したのである。

ほかに、『伊勢物語』（「東下り」）で知られる都鳥をユリカモメでなく、『万葉集』に詠まれた別の鳥（学名「都鳥」）であると考証した著述『都鳥考』を発表、その鳥を得意げに飼育して人々に見せて失笑を買ったり、水鶏（クイナ）の鳴き声を真似て来園者を騙（だま）そうとし池にはまったり、とかく風評の多く、胡散臭い人となりであった。

向島百花園において―1997．1．6

しかし、人柄はともかく、古典遺産に属する名所や花卉・鳥類を行楽に結び付け、ビジネスとした先見の明は高く評価しなければならない。

〈マチヅクリ〉への提言

先日、首都圏のテレビニュースで、水陸両用バスの試乗シーンを放映しているのを見た。そのバスを着想した観光業者は、東日本大震災や原発事故で減った外国人観光客を誘致するには、東京の新しい面だけでなく、昔ながらの江戸情緒を感じさせる面もアピールすることが大切だ―とコメントしていた。

同じことは、外国人向けの東京観光だけでなく、あらゆる市町村の住民に対しても言えるだろう。

行政にすべてを任せっきりにしたり、利便性のみを追求するのではなく、一人一人が地域に愛着をもち、固有の地勢・風土、歴史・文化に関心を払う。住んでいる地域のもつ固有性を知った上で、それを活かした〈マチヅクリ〉を目指して発言し、行動する。その結果として、環境面を含め、より豊かで安全・快適な生活が可能になるのではなかろうか。〈脱原発〉はいうまでもない。

平凡ながら、以上が定年を迎えて担当を終える私のささやかな提言であり、願いでもある。

かとう　さだひこ
（本学文学部教授）